

【批評記事】 支部横断企画「インドを奏でる人々——その音楽受容と変容」

田中多佳子（西日本支部）

正月明けの2013年1月19日、凍結した道路を注意深く歩きながら鬼子母神隣りの東京音楽大学へ向かった。主催者の小日向英俊氏らと共にインド音楽研究会（1988～2002年）を運営していた頃は、さまざまなインド音楽関係の催しを企画したものの、近年は同様の「インドもの」は乏しい限りだったので、以前から心待ちにしていた。小日向氏が代表する科研(基盤C)「日本における南アジア音楽の受容と変容」の一環というが、まさに彼はシンポジウムの企画・立案・発表・司会はもちろん、シタール演奏から視聴覚機器や舞台の設営・運営全般に至るまでのすべてを担う八面六臂の大活躍であった。若者の補助者は一人いたが、欲をいえば、せめて「出演者」としての役割以外は他人にまかせて落ち着いて座っていてくれたら、観客としても彼を気の毒がらずにもっとゆったりした気分で聴いていられたかと思う。

インド音楽は基本的に床に座って演奏されるため、開催者側は観客席とステージの高さのバランスに苦慮するが、会場はA200教室という階段教室で、観客は着席して上から見下ろすような形だったため、どの席からもステージ全体を見渡すことができた。

前半はインド舞踊・音楽公演、後半は前半の主な出演者に寺田吉孝氏（西日本支部、国立民族学博物館）を加えた6名によるシンポジウムという2部構成であった。前半だけでも、バラタナーティヤム（南インドの古典舞踊）、エスラジ（東インドの弓奏弦楽器）、シタール、サントゥール（箱形打弦楽器）という4種目の2時間にわたる質量ともに充実した公演で「ミニ・コンサート」などではなかった。

前半では、事前の案内にもあったように、各々のパフォーマーがインドの「伝統様式」によるものと「応用様式」によるものとの両方を上演もしくは視聴覚資料によって披露した。本企画の主旨に従えば、日本人がインドの伝統文化を「受容」し努力してインサイダーにも認められるに至った「伝統様式」にのっとりた正統的インド音楽・舞踊の演目と、日本人が日本人に向けて発信するために意図的にそれらを変容させた「応用様式」による演目ということのようである。日本では演奏者も生で聴ける機会も特に少ないエスラジやサントゥールも合わせてインドのものを4種目も聴くことができたのも良い機会だったが、主催者の思惑どおりに、各々が2種ずつを意識的に披露したものを聴き比べることで、各者各様の目的意識や意図の違いが浮き彫りになり、興味深かった。

最初の演目であった奥川康子氏によるバラタナーティヤムでは、《シュローカ》と《ティッターナー》という伝統的演目と、『古事記』や『日本書紀』の神話に取材し火中出産の場面を描いた創作《コノハナサクヤ姫》が演じられた。バラタナーティヤムの基本動作、特にアビナヤ（パントマイム的な表現）によって、ストーリーはある程度雄弁に語られたが、伴奏はシンプルな太鼓音のみであったのであまり違和感はなかった。確

かに、バラタナーティヤムではヒンドゥー教の神話が語られるのだから、その語法を使って日本人が日本の神話を語るという発想は不自然ではないかも知れない。

続く向後隆氏によるエスラジ演奏では、まず、逆瀬川健治氏のタブラー伴奏と共に古典音楽《ラーガ・ヘーマント》が奏され、続いて、制作したCDから選ばれた10曲の音源が次々に紹介された。創作中、特定のラーガ的旋法やエスラジの音が使われる一方、曲によりボーイソプラノや自然音、シンセサイザーによる電子音も使用される。そういった品は、「環境音楽」や「ヒーリング」音楽として好まれ、ヨーガ教室や庁舎等またテレビ番組等のBGMとしても多用されているのだとか。確かに最近は日常的に「やすらぎ」を演出するような場面で、このようにドローンやインド的音色、ラーガ的な音づかいなどを含んだ曲を耳にするような気がする。「さまざまな音楽を植物に聴かせたある実験で、最も生育をうながしたのはインド音楽だったというが、インド音楽は人間も含めて遍く生物にとって良い音楽なのではないか」という向後氏の話に妙に納得させられた。

3番目の演目では、まず、小日向英俊氏がシタールで逆瀬川健治氏のタブラー伴奏と共に《ラーガ・チャールケーシー》を演奏した。続いてアメリカ人作曲家デーヴィッド・ローブ氏による《インド》と《鷹ヶ峯》の2曲に手を加えて、神戸愉樹美ヴィオラ・ダ・ガンバ合奏団と小日向氏のシタール、逆瀬川氏のタブラーで合奏された。その場で聴いた限りでは、基本的にはガンバもドローンや旋法的即興で、インド古典音楽を奏するシタールやタブラーに違和感なく溶け込んでいるように聞こえたが、解説によれば、オリジナル版はインド音楽の即興的ラーガ提示部のアーラーブをイメージしつつも、純然たるヴィオール・コンソートのために書かれた楽曲なのだという。

第1部の最後は、ジミー宮下氏によるサントゥールによる《ラーガ・バーチャスパティ》演奏の後、彼がさまざまな音楽文化の演奏家と共同制作した音源が紹介された。なるほど、揚琴、ダルシマー、ツィンバロンなど同類の打弦楽器はさまざまな音楽圏に見られるから、逆にサントゥールにはそれぞれの地域の音楽と違和感なく溶け込める要素は備わっているわけである。

さて、後半のシンポジウム「インドを奏でる人々—その音楽受容と変容」では、司会兼パネリストの小日向氏の問題提起の後、奥川・宮下・向後氏が一言ずつ発言し、ガンバ演奏にも参加した神戸愉樹美氏（東日本支部、国立音楽大学）、寺田吉孝氏がレジュメに基づいた発表を行った。

小日向氏は、752年の東大寺大仏開眼供養会以来の日本における南アジア音楽受容史に触れ、インド音楽が、「ローカルな」音楽としての「公的受容」に始まり、徐々に個人レベルでの「私的受容」となり、今や「ネットワーク的受容」の段階に至り、クラシックのように「グローバルな」音楽として受容されるようになったとの持論を展開した。この「公的受容」とは、さまざまな留学制度や交流制度を背景にインドにわたり苦労し

て学んできた世代の受容の仕方をさすようだが、遣隋使・遣唐使のような国家的事業でもない限り、私個人としてはどうも「公的受容」「私的受容」という用語の使い分けにはなじめない。

続く実演家たちのコメントは、主にインド音楽・舞踊との邂逅に関するものであった。各々、後にインドでの本格的修行に至るきっかけは、奥川氏は青森県のねぶた祭りの「はねと」（鈴をつけた舞い手）にインド舞踊のリズムを感じたことであり、宮下氏は、クラシックギターやビートルズ漬けの中で偶然に聞いた一枚のインド音楽のレコードであり、向後氏はマイルス・デービスのレコードで使われていたタンプーラやシタールの音であったという。

神戸氏の「日本における西洋音楽の受容 ヴィオラ・ダ・ガンバをめぐって」と題された発表は、日本におけるインドという異文化音楽の現状と未来を考える参考になるとして、日本における西洋楽器ヴィオラ・ダ・ガンバの受容についての見解が語られた。日本人は西洋の楽器を受容はしても、西洋音楽の多声性や協和音を好まず、本来の存在理由にも興味を示さない、という聴き方の特殊性が指摘された。

寺田氏は「南インド音楽・舞踊の還流」と題し、在外インド人(NR I :Non-Resident Indians)の活動に焦点を当て、インド外でインドの伝統音楽を身につけた裕福で発言力の強い彼らの文化が、逆にインド本国の音楽文化に影響を与えつつある現状を指摘した。そして、今日、文化の影響関係をとらえるためには、インドから外へという一方向ではなく、外からインドへ、さらに外同士といった多方向で、しかも「本場中心主義」、文化の中心と周縁といった意識を廃して相対化する、「還流」という考え方が有効ではないかと提案した。

ディスカッションでは、奥川氏の「日本人の音の聴き方が異なるのは何故か」という問いかけに、神戸氏が「互いに土台とする文化的基盤が異なるからだ」と答えたのを契機に、日本人の異文化受容の仕方の特殊性に話題が集中した。寺田氏は、NR Iによる文化の逆輸入のペースが速いのはインド本国側にも新しい要素が入るのを好む姿勢があるからであり、そもそも「伝統」という概念自体が意図的に作り上げられてきたにもかかわらず、日本人にはそのような意識が希薄であると述べた。フロアーからは、3番目の演目の作曲家であるデーヴィド・ローブ氏が、日本人が画一的に語る「クラシック」の聴かれ方も、実はヨーロッパとは異なる背景をもつアメリカやオーストラリアなどでは異なり一様に語れるものではないと指摘した。

全体として、音楽学の研究者と実践的音楽家たちがそれぞれの立場から意図を明確に語ることによって、「受容と変容」のあり方をめぐるさまざまな考え方が具体的に浮き彫りとなり、非常に興味深い刺激的な企画であったと思う。この構成自体は、昨年度(2011年10月)、第62回東洋音楽学会大会で、私も関わり企画・構成した公開講演会「日本に息づく韓国音楽」を思い起こさせた。前半は日本で活躍する韓国音楽・舞踊家

3人による公演、後半は研究者の植村幸生氏（東京藝術大学准教授、東日本支部）が聞き手となり、3人が日本で韓国の伝統芸能に取り組むことになった経緯と現在の思いを話してもらおうというものだった。それが何らかの参考になったかどうかはわからないが、本企画は、規模においてそれをはるかに凌ぎ、内容・構成にもアカデミックな意図が明確に反映された充実したものであった。このようなものを科研の一環たる単独の催しとして構想し、実現にこぎつけた小日向氏の熱意と努力に敬意を表したい。

観客は第1部では百数十名はいたと思うが、休憩の間に多くが退出し、後半は30～40名になってしまった。場所柄もあるかも知れないが、「珍しい音楽のコンサートを聞きに来た」親子連れなど一般の方も多かったようで、このようなコンサートに一般的ニーズがあることを認識した。

事前の宣伝に「インド音楽・舞踊増殖中の日本！その姿をお見せします。」とあったが、本企画に半日どっぷりとつかってみると、まさに、映画「踊るマハラジャ」やカレーの宣伝に使われるタブラーの音にのみインド音楽文化の受容を見出していた時代は去り、今はインドの響きが一音楽として違和感なく日本のサウンドスケープの中に溶け込みつつあることを思い知らされた。予告にたがわず「日本でのインド音楽の現状と未来」を考えさせられた一日だった。

なお、今回で私は支部横断企画なるものに参加したのは3回目（名古屋芸術大学、静岡文化芸術大学につぎ）だが、充実した内容に比して、本学会会員の参加が少ないのが気になる。今回は前2回よりは多かったものの、東京の交通至便なところで開催されたことを考えると決して多いとは言えず、この企画に対する学会の姿勢にいささかの疑問が残った。